

畠山 篤著

『岩木山の神と鬼』

小山 隆秀

一、はじめに

津軽地方の代表的な霊山である岩木山信仰の背景には、仏教や神道、民間信仰、巫俗等、多彩な要素が複雑に構成されていることは、以前から諸学の先達が指摘してきた。その複雑な構造は、そのまま寺社の儀礼習俗や年中行事、伝説や伝承にもそのまま反映されている。例えば同じ話形でありながらも、登場人物が様々に入れ替わる伝説等があり、それがどのような歴史的背景を示唆しているのか分析することが、困難となっていた。

しかし本書は、歴史の諸相のなかで、様々な伝説・伝承が幾重にも重なり、複雑怪奇となってしまう糸を、ひとつずつ丹念にひとつずつ紐解きながら、明解に解析していく。

二、本書の構成

まずは、本書の構成は次のとおりである。

第一章 岩木山の神と由来譚の生成―百沢寺・イタコ・村人の語り

一 はじめに

二百沢寺が語る岩木山権現由来譚

1 岩木山権現由来譚の梗概、2 権現由来譚の成立時期、3 丹後日和、

4 津軽以外の丹後日和、5 百沢寺の語り

三 二つ目の丹後日和の由来

1 二つ目の丹後日和の由来、2 高照神社の語り

四 三つ目の丹後日和の由来

五 丹後日和の背景と変容

1 捨て子と人身売買の風習、2 岩木山の神の予兆と崇り、3 丹後日和の政治的利用

六 イタコが語る〈お岩木様一代記〉

1 イタコの祭文、2 〈お岩木様一代記〉の梗概、3 慈愛に溢れる女の語り

七 〈お岩木様一代記〉の原祭文

1 日神の子を産むシヤマン、2 おさだ 〓 栄玉の明神 〓 神の妻、3 安寿姫（庵主姫） 〓 日神の娘、4 庵主坊主 〓 日神、5 父と山椒大夫 〓 試練を与える者、6 いなかった厨子王とおふじ、7 十六歳鉄漿

八 東アジアに流布するシヤマン文化

1 思い松金、2 韓国の本解・クツ、3 浅間の本地、4 高野の巻、5 照手姫と照日の巫

九 赤倉山の日神を祀る女性シヤマン

十 佐渡と丹後の〈安寿語り〉

1 佐渡の〈安寿語り〉、2 丹後の〈安寿語り〉、3 東アジアのシヤマン

文化

- 十一 村人が語る三姉妹の神座争い譚
 - 1 伝承の事例、2 末の妹が鎮座した岩木山、3 村落共同体の自己主張、4 原風景としての三姉妹の神座
 - 十二 三つの由来譚の生成と変容
 - 1 岩木山権現由来譚の生成と変容、2 〈お岩木様一代記〉の原祭文と現祭文、3 三姉妹の神座争い譚の強靱さ
 - 十三 結び
- ### 第二章 岩木山の鬼と水利伝承―津軽の鬼・山人・大人
- 一 はじめに
 - 二 鬼・山人・大人伝承の分布と分類
 - 三 単純型
 - 1 鬼の穴・大人の足跡・大男、2 入山を拒む鬼・大人・山の神、3 鬼の湯、4 地名由来
 - 四 山幸型
 - 1 鬼人・大人・山の人・山の翁（鬼ツコ）、大人の来訪
 - 五 農耕型
 - 六 鉄器型
 - 1 岩木山北西麓の製鉄遺跡、2 十腰内の地名伝承、3 『西津軽郡史』の伝承（1）、4 『西津軽郡史』の伝承（2）、5 赤倉山の鬼が打った名刀、6 全国的な鬼の鍛冶伝承、7 開発と農耕に威力を発揮する鉄器
 - 七 カミサマ（民間巫者）型
 - 1 種市の永助様、2 竹内金兵衛と浅次郎
- ### 八 退治・服属型
- 九 権威者守護型
 - 十 鬼沢の鬼・山人の足跡
 - 十一 『津軽俗説選』の大人の談
 - 十二 『弘藩明治一統誌』の鬼神社の伝承
 - 1 本文、2 農耕型と鉄器型、3 弥十郎Ⅱ神人、4 水利伝承、5 御神体の蓑・笠、6 御神体の鍬、7 鬼の土俵、8 祭日・鬼の腰掛けの柏
 - 十三 『統々津軽のむがしこ集』の鬼神社の由緒
 - 1 本文、2 鬼の田と石枕
 - 十四 『津軽俗説選』の鬼を祭る宮の伝承
 - 十五 鬼沢の七日堂祭（二十九日堂祭）
 - 1 赤倉の鬼と鉄、2 鬼神堰由来の鍬と農具、3 津軽の七日堂祭の概要、4 民俗行事を基層にした七日堂祭、5 鬼伝承と三拍子行事、6 鬼伝承と御柳行事、7 稲筵川副柳の祝い歌、8 鬼伝承と七日堂祭
 - 十六 鬼の寺の伝承
 - 1 農耕型、2 二つの権威者守護型
 - 十七 悪鬼伝承のない鬼沢
 - 十八 鬼・山人・大人の原像と変容
 - 1 鬼・山人・大人の原像と変容、2 自然採集から稲作へ、3 水利伝承、4 共同体の維持、5 仏説への摂取
- ### 十九 結び

三、おもな内容

示唆に満ちた多くの章と節で構成された本書のなから、とくに筆者が関心をいだいた箇所について、順に紹介していきたい。

第一章「百沢寺が語る岩木山権現由来譚」では、岩木山権現の由来譚が元禄年間に成立したことが推測される。するとそれは、上方の高い情報収集能力によってその十数年後に『和漢三才図会』に掲載され、二十数年後には津軽の正史『津軽一統志』編さんに活用されたことが明らかにされていく。始めは個々の地域伝承群にすぎなかった「丹後日和」が、十八世紀末には、弘前藩の政治システムとして強化され、実際の事件を伝承化するにまでいたったという。また、丹後日和の禁忌伝承は津軽だけではなく、松前、南部、秋田、越後などの日本海沿岸にもあったことも指摘している。さらに由来譚の背景には、元禄の大飢饉があり、その社会不安を岩木山権現の神威によって乗り越えようとする動きのなかで、百沢寺と藩権力が連携し、百沢寺山門や山王権現の整備、入国者のチェック体制を整えていった動きがあるという。

「二つ目の丹後日和の由来」では、近世後期に生成された高照神社等の伝説が、岩木山神となる安寿姫を国安珠姫へ、安寿の弟厨子王を花若磨へ読み替えた構造であることが浮き彫りにされる。「三つ目の丹後日和の由来」では、小泊の尾崎神社が鶏卵や丹後船を嫌うという伝説が、丹後日和伝承の古態と推測され、秋田能代の播磨船伝承や越後直江津の丹後船伝承と類似しているという。そして「丹後日和の背景と変容」では、山椒太夫伝説の背景に、中世期の人身売買の風習と、それに対して

民衆が抱いていた忌避、警戒の念が投影されているだろうこと、そして異変を予兆し、津軽一円にわたる神域、結界を汚す不浄の者へ祟りをなす神としての岩木山権現があり、ひいては領内の天候不順や不作、不漁、飢饉等の理由付けとして丹後日和が政治的に利用されていたことを推測している。

「イタコが語る〈お岩木様一代記〉」では、イタコの祭文のひとつで、安寿と厨子王の出自と神になった経緯を語る「お岩木様一代記」が、かつてはお山参詣の初日である旧暦八月一日に岩木山神社で語らなくてはならない存在だったこと、物語の構成から元禄期に隆盛した説教節「山椒太夫」の影響が考えられること、その主題が家族問題で悩む者の救済にあり、社会的な支配・非支配を背景とした怨念と祟りを主調とする岩木山権現由来譚のあり方とは明らかに異質であると指摘する。そして「お岩木様一代記」の古態は、邂逅型の日光感精説話であり、奄美の「思い松金」、韓国の「帝釈本解」、中世の「浅間の本地」にもつながるという。また、一代記に登場する「おさだ」が、女性シャマンを意味する「菜玉の明神」であり、その娘である安寿（岩木山権現）とともに、日神から与えられた試練を乗り越えて、娘が神格を得て、人々を救済することが信仰の核となっているという。さらに一代記の古態には厨子王とおふじが存在しなかっただろうこと、十六歳鉄漿（じゅうろくがね）が成女戒を土台として成巫式を反映しているだろうことが指摘されている。

「東アジアに流布するシャマン文化」では、津軽の「お岩木様一代記」の類話が、鹿児島県奄美地方や韓国にもあり、浅間の本地、説教節

「苜萱」の「高野の巻」にもあるなど、東アジア各地に広がっており、シャマン文化につながっていることを述べている。「赤倉山の日神を祀る女性シャマン」では、岩木山が日神信仰の霊地であり、旧暦八月一日に山頂で御来光を拝む習俗は、日神の娘である安寿や日神の妻である「おさだ」を信仰するシャマンに関すること、「お岩木様一代記」も赤倉沢を根拠とするゴミソやイタコなどのシャマンたちの影響が大きいことを述べる。そして「佐渡と丹後の〈安寿語り〉」安寿と厨子王の伝承は、佐渡、丹後、越後にも流布していることが報告される。

「村人が語る三姉妹の神座争い譚」では、三姉妹のうち末の妹が岩木山の神となり、姉たちは別の山の神になったため、互いの山は登らないという伝説について、各地の事例を比較しながら、古態は岩木山、小栗山、阿闍羅山の三つの争いの伝説であり、その背景には、各地の山々への信仰が、岩木山信仰へと中央集権化されていったことへの混乱と対抗心があったのではないかとしている。

続く第二章「岩木山の鬼と水利伝承―津軽の鬼・山人・大人」は、岩木山麓の鬼沢集落に伝承された鬼、山人、大人をめぐる水利伝承が、どのように形成され、いかに機能しているかについて、多くの口承文芸資料を丹念に読み解くなかから考察を進めていく。

まず「鬼・山人・大人伝承の分布と分類」では、青森県内の鬼が、A 単純型、B 山幸型、C 農耕型、D 鉄器型、E カミサマ型、F 退治・服属型、G 権威者守護型の七つに分類できることが述べられる。このうちA～Eが古層の信仰を基盤とした鬼伝承であり、F、Gが、古くからの在来神が中央または地方権威者と連携した新宗教が参入してきたことによ

り生まれた新層の信仰であろうという。第二章では、論者による綿密な資料調査によって集積された様々な伝説や伝承、聞き取りデータが紹介されるが、個々の資料が、A～Gの話形いずれに該当するのかという綿密な分析が展開していく。

また「単純型」として、鬼の穴・大人の足跡・大男、入山を拒む鬼・大人・山の神、鬼の湯、地名由来があげられるが、これら鬼、山人、大人、大男、魔神、山の神は同じ存在であり、鬼、山人、大人の原像は山の神であろうとする。その語りの中核は山の戒めであり、さらに周辺に拡散していったのだろうという。

そして、深山に棲む大人が幸を授けてくれるという「山幸型」の語り手は、山子、樵夫や大人の関係者であったろうという。また特定の家へ鬼が通う伝承も、神からの加護と幸を期待した家の祭りの由来を語っているという。

稲作を中心とした年の節目に、大人が来訪し、晴れの日の餅と御神酒で祭られたり、農作に協力したという「農耕型」の話形を紹介し、山幸型も農耕型の話も、秘密裏に行われていた鬼の来訪があり、その祭祀が禁忌を伴う特異なものだったので、それを知った周辺の人々が鬼の来訪を語り出したのではないかとする。

「鉄器型」については、岩木山北西麓の製鉄遺跡、十腰内の地名伝承や、自治体誌に記載された伝承、赤倉山の鬼が打った名刀、全国的な鬼の鍛冶伝承、開発と農耕に威力を発揮する鉄器について紹介し、農耕では生産力向上のため、鉄製農具が重要であるため、農耕型の鬼伝承には鉄器型の鬼伝承が密接に関わるといえる。

そして、種市の永助様、竹内金兵衛と浅次郎という、十八世紀以降、岩木山へ入って山人やカミサマになった人々の伝説である「カミサマ型」の語り手が、そのカミサマの行状を見聞きしている周辺の者や巫業に携わるカミサマ達だったという。

百沢寺や太田家、猿賀神宮寺の語り、赤石川流域の修験等による「退治・服属型」の鬼伝承は、岩木山の鬼が時の為政者へ服属しなかったために、退治されたり、服属を誓われるものであり、そこには支配被支配という社会構造が反映されているという。また百沢寺が赤倉の鬼一族をコントロールできることを権力側に示すような内容もある。そして起請文を残す鬼の類話が岩手県和賀郡の大竹山にもあること、それらには中央の政治的勢力が宗教とともに地方へ進出していったことを背景とした唱道文芸であるといい、百沢寺が在来の神を支配下に置いていく過程がうかがわれる。なお、このような王権や地方権力と連携した宗教家のイデオロギーの影響を受けた退治・服属型は、蝦夷地におけるアイヌ民俗やロシアとの緊張が高まった元禄と安政期を画期として増えている。

「退治・服属型」の鬼が被支配者側に立つのに対して、「権威者守護者型」の鬼は支配者側に立つという。例えば、岩木山の二鬼が、津軽を統一する津軽家に助力した伝説には、津軽家と百沢寺が鬼伝承を利用することがそれぞれの権威付けのためには利害が一致していたことが伺える。

そして鬼・山人と親しく交わった鬼沢の弥十郎とは、村落共同体で鬼・山人を祭った始祖であり、共同体の祭祀を司る役割の名称として代々継承されていたと考えられるといい、同じ名前が八戸や下北の民俗芸能

えんぶりの藤九郎の古名にもつながるといい、農耕神と祭る神役の名前であるという。

また、鬼神・大人の水利伝承が戦後の意識のなかにも生きており、貯水池の造成等、現実の経済的な生産活動にも直結していることを指摘する。そして近代に、鬼神社の鍬や鬼太夫の玉鋼等の御神体の所屬を巡る争いがあったことを紹介し、これらの存在が共同体の精神的支柱であったことを解説している。そして赤倉山の端山と鬼沢との隣接地にある鬼の土俵が、鬼を祭祀する場であり、かつて神事相撲のような儀礼が存在したであろう可能性を指摘している。

鬼沢の鬼伝承と七日常祭（二十九日常祭）の祭祀構造についても分析がなされる。赤倉山中の鬼の土俵には製鉄伝説が関わっていることを述べる。七日常祭の三拍子の儀礼で使用される三種の鉄器（鍬・太刀・鎌）の意味と、七日常祭礼そのものについて、岩木山神社の同行事との比較から、儀礼構造とその成立過程を分析し、もともと基層にあった家の行事が神社行事になったことを述べ、柳を用いる年占、祭具を用いる年占、臼鍋餅を用いる年占などの民俗行事に、外来から天台系の疫病退散呪術を加えたのが七日常祭であるとしている。そして七日常祭の三拍子行事は、家の祭りの雪中田植えが大型化したもので、天候に恵まれ、鬼につながる四種の鉄製農具の力で農業生産力が向上し、秋の豊作を迎えるための予祝儀礼であるという。そして七日常祭の御柳行事は、基層にある家の祭りの粟穂・稲穂が大型化したものであるという。

そして「鬼の寺の伝承」では、赤倉山の鬼を祀る「鬼の寺」である曹洞宗赤倉山宝泉院の由来譚は、農耕型の話形で寺院の名義と祭神が赤倉

の鬼であることを説く一方で、権威者守護型の話形で、寺の祭神がいかに権威者の統治に貢献したのかを説くことで、寺格の高さを宣伝するため法要などで説かれた唱道文芸であるとする。一方で「悪鬼伝承のない鬼沢」では、第二次世界大戦直前の昭和十五年（一九四〇）は、皇国史観から皇紀二千六百年となり、国威発揚のため英米を鬼畜視する風潮があったが、鬼神社ではそのような動きがなく、同年の七日堂祭でもその趣旨がなかったのは、村立てから鬼を神として崇敬してきた同集落の歴史的背景があらうとしている。

「鬼・山人・大人の原像と変容」では、津軽地方の山々に伝わる鬼の伝承は、古い山の神信仰の基層の厚さを表しており、そこには崇る面と幸をもたらす面の二つがあり、里人や製鉄職人、民間巫者が語り手の中核であった。しかし神仏混交の宗教が津軽に伝播すると、在地の鬼・山人・大人の語りの一部は、退治・服属型の鬼や、権威者諸語型の鬼となり、布教のために活用された。一方で古態の伝承も残された。幸をもたらす鬼・山人・大人の伝承は、山子や樵夫、漁師たちの信仰を反映しており、稲作へ転換し新田開発や感慨工事をした時代は赤倉の鬼の農耕型、鉄器型の伝承に反映された。そして逆さ堰の伝承は、水利権が赤倉の山の神から保証されたものであることを外部に主張する語りであり、内にあつては鬼沢の村立てに関わる鬼・山人・大人を祭祀することは村落共同体を維持していくための紐帯であり、近代以降も機能している。一方で寺院は鬼の語りを、王権に接近し、自らの寺格を高めることに活用したと解析する。

四、結びにかえて

近代初頭に採録された岩木山の伝説や伝承には、世代交代で現在ではもう採録不可能となってしまうた貴重な資料が少なくない。近年になるとその書承が一般にも流布し、観光資源等として新しい形で再利用されたり、急激な変容まで始まっているようだ。そのなかで本書は、近代の採録当時の姿を記録している伝承資料のひとつひとつに立ち返って、再度新たな視点からの検証に挑んだものである。多くの新たな知見とともに、我々の前に今後の岩木山信仰研究の新たな座標を提示してくれる慧眼の書である。

(A5判、229頁、平成二八年二月、(有)北方新社、

本体価格二〇〇円＋税)

(おやま・たかひで 青森県立郷土館主任学芸主査)